



富田っ子

学ぶ喜び 感動のある学校

富田っ子の未来を 地域とともに育む学校

令和 7 年 9 月 30 日(火)発行責任者 校長 國分 洋

天高く 馬肥ゆる秋 実りの秋本番へ



早いもので今年度も折り返し点となりました。本日、評価二期制による前期が終了となり、通知票「あゆみ」を配付いたしました。暑さに負けず頑張った前期、子どもさんと一緒に上半期の学びを振り返っていただき、頑張りや成果について称賛と励ましをお願いいたします。

明日からの後期も実り多き期間となりますよう保護者の皆様との連携を図りながら、富田っ子一人一人の日々の成長や努力を見逃さず、**主体的な学び、挑戦する心の育成**に努めてまいります。

読書の秋 本に親しみ、心に安らぎを

読書の「よさ」は様々いわれておりますが、知識増加や読解力、表現力向上よりも、心の安定をもたらすことが何よりの効果であると考えます。

タブレットやスマートフォン等のデバイスや SNS の急速な普及により「読書離れ」が指摘されている中、2024 年全国学校図書館協議会の調査によると、**小学生（4 年生以上）の 1 か月の平均読書冊数は 13.8 冊**で史上最高を更新したと聞いております。＜但.学校図書館+公共・民間図書館+購入図書(含電子書籍)の総冊数＞

読書は子どもたちの思考力、想像力と、豊かな心を育むために重要な役割を果たします。小学生のうちに本に親しみ、本を通して物事を調べ、考える習慣を身につけられるよう、まずは学校図書館の積極的な活用を今後も働きかけていきます。ご家庭でも親子で読書の秋を楽しんでみてはいかがでしょうか。

富田小学校図書館 今年度上半期の貸出状況（R7.9.26 現在）

	1 年(92 名)	2 年(91 名)	3 年(88 名)	4 年(88 名)	5 年(92 名)	6 年(85 名)	全校(536 名)
貸出総数(冊)	3, 2 7 6	2, 7 3 8	2, 5 0 8	2, 4 3 9	2, 1 8 1	2, 2 9 9	1 5, 4 4 1
一人当たり平均	約 3 6 冊	約 3 0 冊	約 2 9 冊	約 2 8 冊	約 2 4 冊	約 2 7 冊	約 2 9 冊

「学校図書館利用の読書量」では、どの子も年間 50 冊程度読めると素晴らしいですね

「令和 7 年度 市読書感想文コンクール」出品作品より～抜粋にて紹介～

◇ 1 学年 「きょうりゅうゆうえんち」をよんで

りゅうくん、きょうもひとりぼっちなんだね。こうえんでなかよくあそんでいるおともだちに、「なかまにいて。」っていうのは、はずかしいよね。ぼくもおなじきもちだよ。～ぼくもはずかしいけれど、ゆうきをだして、りゅうくんみたいに、おともだちに「まぜて。」といえたよ。はじめてのおともだちとおしゃべりができるようになって、すこしずつなかよくなれたよ。「いっしょにあそぼう。」ってじぶんからいえるようになったんだ。



◇ 2 学年 「ひかりのぼうけん」を読んで

～わたしのいちばんすきなばめんは、コスモが、ベティの本からでてきたところがすきです。なぜならコスモが本の中からとびだしたところがかわいいからです。このばめんを読んだらふしぎなきもちになります。もしわたしがベティだったら、ベティよりびっくりしてよろこびます。このばめんは、ベティとコスモのぼうけんにつながる大切なばめんだなと、思いました。わたしも絵本の中のとうじょうじんぶつとほんとうに出会えたら、いっしょにあそんだり、ぼうけんしたりしたいです。～

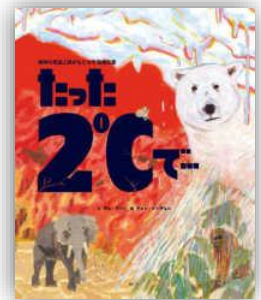




◇ 3 学年 「たった 2℃で…」を読んで

地球の気温が 2℃上がっても、そんなにかわらないだろう。わたしは、この本の題名を読んだときに、そう思いました。なぜなら、いつも通り生活をしていて、気温が 2℃ちがっても、「すこしあついなあ」くらいにしか思わないからです。でも、この本を読み進めていくうちに、その考えは、まちがっていたことに気がきました。～

地球温暖化は、海や山も、そこに住んでいる生き物たちも、そしてわたしたちも、今まで、できていたことができなくなってしまうことが分かりました。地球温暖化をふせぐことができるのは、人間だけです。でも、一人だけががんばっても、ふせぐことはできません。それぞれ一人一人が、できることを気をつけていくことで、地球を少しでも守っていくことにつながっていくと思います。



◇ 4 学年 「昆虫レストラン ななほしへようこそ」を読んで

ぼくは、昆虫が大好きです。おばあちゃんにそのことを話したら、この本をくれたので、すぐに読み始めました。～「昆虫食を通じて、かんきょう問題や文化について、広く考えてもらえるきっかけになればいいなあ。」とねがって始めたお話です。～この本で気になったところは、いろいろな昆虫をおいしくたくさん食べることができるということです。～ぼくは、昆虫の命をむだにせず、おいしく昔から食べられているのならば、自分もいろんな昆虫を食べてみたいという気持ちになりました。～昆虫食の文化やれきしを知ることができたし、昆虫食をもっと知っていききたいし、ほかにもどんな文化やれきしがあるのか調べたい気持ちになりました。～



◇ 5 学年 自分だけの色 ～「ぼくの色、見つけた!」より～

～どうして信太朗は色覚しょうがいのことを周りに伝えなかったのか、わたしはこう考えました。周りに色覚しょうがいのことを伝えた時に、「もう少し詳しく説明してほしい。」と言われたら、説明がむずかしくてこまってしまうのではないかと思います。～五年生のクラスがえの時の信太朗の気持ちです。色覚しょうがいが原因で、またからかわれたらどうしようと不安な気持ちでいっぱいだったと思います。新しい教室に足をふみ入れるのはとてもきんちょうしたと思います。～ある日、信太朗は苦手だった絵を自分からかきたいと思い、三日間かけて、かき上げました。その絵は「みどりのララ」という題で、自分だけの色を表現できたのです。それは他人とはちがって見える信太朗にしか見えない色であり、それを個性というのだと思います。～しょうがいを持っている人と出会ったら、その人とわたしのちがう所があっても、その人の個性なんだとみとめられる人になりたいです。



◇ 6 学年 ぼくの色、見つけた!

「私は色を見分けることができる。」当たり前のことです。けれども、それが当たり前じゃない人もいます。～世界の見え方がちがっても、自分なりの色を見つけていこうというお話です。～私が登場人物の信太朗だったら、自分が色覚障がいだということをかくしつづけると思いました。なんとかまわりにあわせて、一人で悩みごとをためこみつづけていたかもしれません。～信太朗も平林先生と話して変わったこともあったと思います。これからは、悩みごとを一人でためこみすぎずに、だれかに話そうと思いました。～

